吉田道灌雄飛孫

六

へ13
3915
6

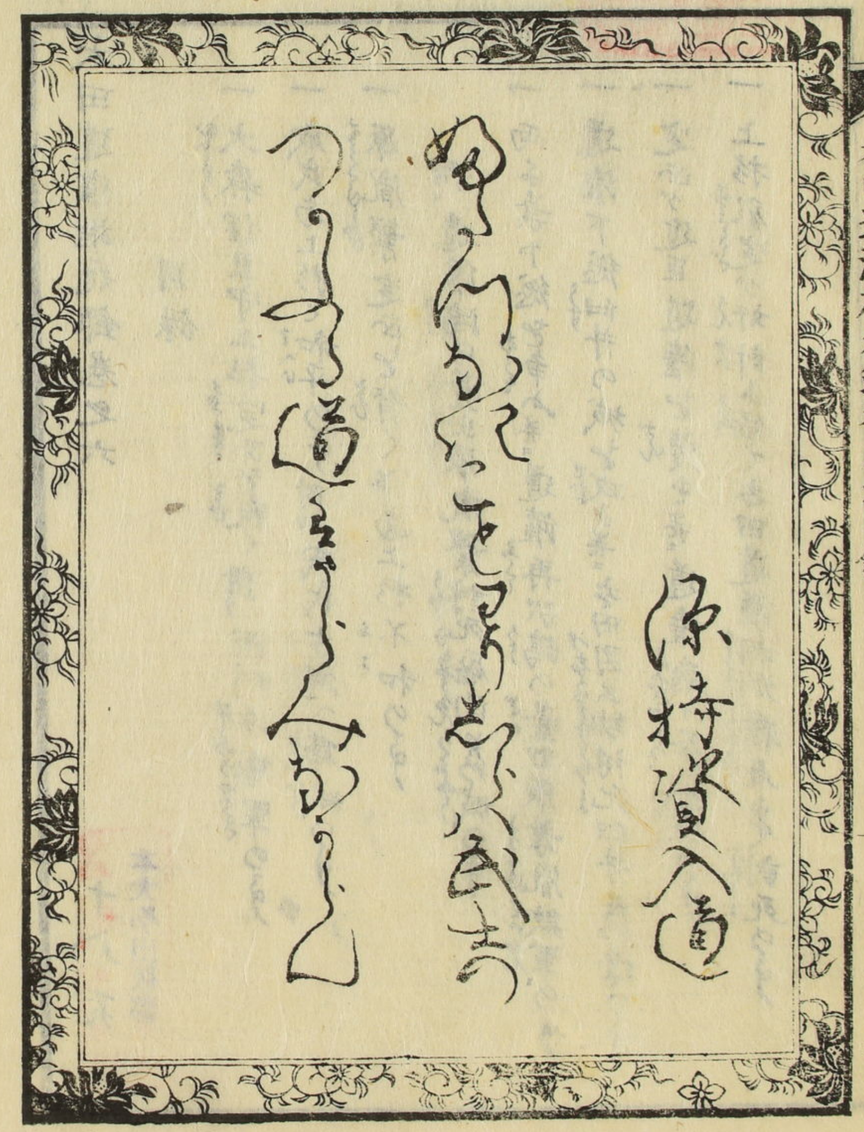
門 へ13
號 3915
巻 6

太田道灌雄飛録巻之六

目録

一 大森伊豆守上杉定正を救く附り相州平塚軍の事
一 成氏与上杉と和平の事附り成氏古河へ帰城の事
一 原胤繁定正を背く并与上杉不和の事
附り 道灌鴻の臺出張胤繁討死龍南義城の事
一 両子兼て総を争ふ并ニ道灌再び鴻の臺出張孝胤敗軍の事
一 道灌下総臼井の城を攻る并ニ古田図書助討死臼井落城の事
一 定正が近臣道灌を讒せ并ニ道灌扇ヶ谷へ出仕の事
一 上杉顕定が奸計ヨ依て太田道灌相州糟屋ニ討死の事

本大學出版部藏
贈



太田道灌雄飛録巻之六

東都　木村梅年忠貞編輯

○大森伊豆守上杉定正を教く附り道灌相州平塚軍の事

此は又相州小田原の城主。大森伊豆守は多年扇ヶ谷の旗下かりろがいつゝある思慮やあらん。定正を教くに成氏へ志を通ずる由その沙汰かなしなりしが定正こゝを空く大に恐り。ゆゝしき事の大いなるぬれ衣なり。弛怠なく絶せよと。太田道灌に兵士を遣く比し高けうの大森は敵を防ぐんとす。同国平塚に城を構え。七百余騎を楯こゝる。道灌は武蔵在赤在くれば支より直に弛向ふ。兵士僅に十騎に過ざるも齊藤加賀守。道灌はむつ沙に出張あるに無勢なりしこゝに合戦に及ぶ。我ゆゝんへいくと存ずるあり。甚くに徒士も危きいんと中も時に道灌少も驚く色なく。さるべとよかる一揆の起り

さゝんハ兵を挫く発まるの故実なり。今熟々と敵の備を察するに。大衆が了簡ハ籠城勢の寄来らバ定めて大勢にそあるべきぞ。大軍を催促せん事おもひしよりも日数を経べし。其あひだ敵の寄せざる其前に兵粮米を運入させ永く籠城の用意せよと軍兵も粮米も多く備方に分散し。乱妨せんハ必定なり。其間におし寄て城を攻るものならバ敵ハたちまち敗走べし。是も守りなきを攻るの上策なり。進めや者どもと自身真先に乗出し。ひとき道をゆく軍勢をせ岩槻百井から平塚に押寄て。手ぐに攻めよる案のごとく城中にハ兵士諸方に分散して城に残れる者とてハ三百人にハ過ざりしそれも若く壮んなる輩ハ乱妨のためいでたち其のこる跡ハ老年の弱歩ども任せざるものなれども。防ぎ矢を射返しされど寄せ手ハ勇む色もなく難なく本城に乗入り。城兵どもハ腹立より

逃出るを追詰て討て一日が中に攻おとし。首を斬ること二百廿七級也。大将大森伊豆守も軍士と共に出るが城もつゐに落られバ。たべきやうもなく箱根山に逃へやうやく身をかくしてぞ居たりける。

○成氏再両上杉と和平。附り成氏古河へ帰城の事

却るに両上杉ハ諸臣と評議しけるハ。成氏武威落くありて。千葉に潜なれども尚時を窺ふの動バ一揆をなさん是御所と和平調へざるゆゑ。管領家を背くもの此上にも絶ずして静謐の功なかるべし。先此既に此事ありたれども。古河へ御座なし候に於てハ。奸乱を企るもあるべく間なやく和平の儀を申上げ。古河へ御帰城なしかるべけんとて結城簗田をもつて此事を申上られバ。成氏にも数年流浪の辛苦に退屈の時なりけれバ和平に同心ありて。文明十戊戌の年。七月十七日ふたゝび古河へ御かへり去ぬる

文明三辛卯の年五月より此ゆるりて八年の星霜を経成れも既に十二
年にぞなりぬる。ゆるぎなる馬加康胤入道常輝。爽に遅ふらる猶るの
兵百騎ばかり。副ふく扶ふまゐりて。さて又関宿の城を。簗田中務丞晴
政朝に預け置るとて。左衛門尉の所のありさまを。入あんみに鎌倉の
中を似せられども。さすがに在所のなりて。さしたる殿のかり屋この
数く帳莫さいとまで形のごとくに有りしかど。四方去りて久しく空虚のなりぬれば。
めづらしかるに荒まさりて穿てる壁に蔦蘿たひまつわりて。門はに八重葎
むぐらあらく荻吹きさむ。軒端のうぜ。おく白露もいと冷うに板間を洩る
月の影に青苔を照しそ。ものぶ草のあはれ昔をきくふさとかりそめ古木の
梢に呼び。狐乱巣の叢に遊ぶ。さぞかり大小名の出仕せし時。僮僕
後者のいろめしそが大門に絶るもなく。腰輿乗馬しきりに往来

も其ことに入りく。柳條多くびしく槿花暮あはるに四方ち死人の外に行方
まあらまるものもあるく。ひとをあぐるもかりぐるもとばかりに今更に
ひんぬしそ。ものの手よつるそも懐旧の涙をぞ流しあひける。

○原胤繁定正を殺す。附り両上杉不和。兵に道灌下總の國鶴の臺へ出張の事

さてあるに古河の御所と管領家と和平整ひ。成氏は城中破壊の所く。
彼後ありて。ひとりあひ。上杉顕定も上野平井に城郭をかまへ彼所に
兵軍器ホを数多集の。これを根城として八月のすを敵なを然るに
扇が谷の上杉定正も管領と同じく管領なれば家令新してあらそひを行ふ
定正は内管領太田道灌あるに。その平死道を地ことひ形状
己を責てるを安んぜず民を憐む士を育ひ賞する事重くし四海をわは

猶くも。かりしかども八州の士民皆道灌の仁徳を慕ひ招くるまゝに定正は奇くも。山の内の殿定を背く者日を追ひて多くぞなりまさりける。こゝに殿定大に憤り。抑も上杉は骨肉の中なり。然るに互に水魚の契をなして好を他家に比べきの臣。今あの家は既に八州の棟梁東国鎮府の職なり。何ぞ咎の思ひ立ちなん。殿定が従軍を別離せしめ定正が随兵となるこを遺恨なれ。さるにても存ありてのうらべと猜むこそ甫に崩しく。上にあらせるのなれども。心中は害心を挿まれ。終に確執の種となりぬるこそ。此は下總國の住人千葉が家長系式部少輔亂繁を。年比扇が谷の旗下なりしを。山内殿定の方より密に人を以て種くに乱猶ひ。定正を背かせく終に味方と成しぬる。此は扇が谷定正倍へ少て安らぬるなり。多くぞ従軍を殿定に乞ひ。終に差遣ぶ。

味方の勢は太田山内へ従へべし。殊に人々とよと亂繁は陪臣といへ。味方の中にも有勢の大名に。一人を罰し。万人を懲せは政治の法こそ。太田入道道灌に命して。彼所に向ひ亂繁を誅せよとて。文明十年戊戌七月。太田持資入道道灌一に倍強を引率して武蔵在土を打立下總國に発向ス。系式部少輔亂繁此由を聞て。さしは味方ゆも防戦の用意をせよとて。同國臼井の城の堀を深くし。塁を高くし。柵を修理して。櫓を上げ。兵勢七百騎人楯籠り。近隣を犯し掠めて兵粮を奪ひ。又程遠き境をば劫して國兵を催促し。堅固にぞ構へける。太田入道は臼井の城を攻て要害を伺ひ。攻めんと見課せられば。城麦ゆるるにて先同國葛飾郡鴻の臺とて。地利を見立要害に付て向ひ城をぞ立てる。抑此鴻の臺とは西南は利根川の

流張の事りて麓を巡る毛を我良女岐の瀬と号け切落さく時ちく屏風を立るがゝし毛より上まあうて松戸と以毛と下ま市川と以るを渡り

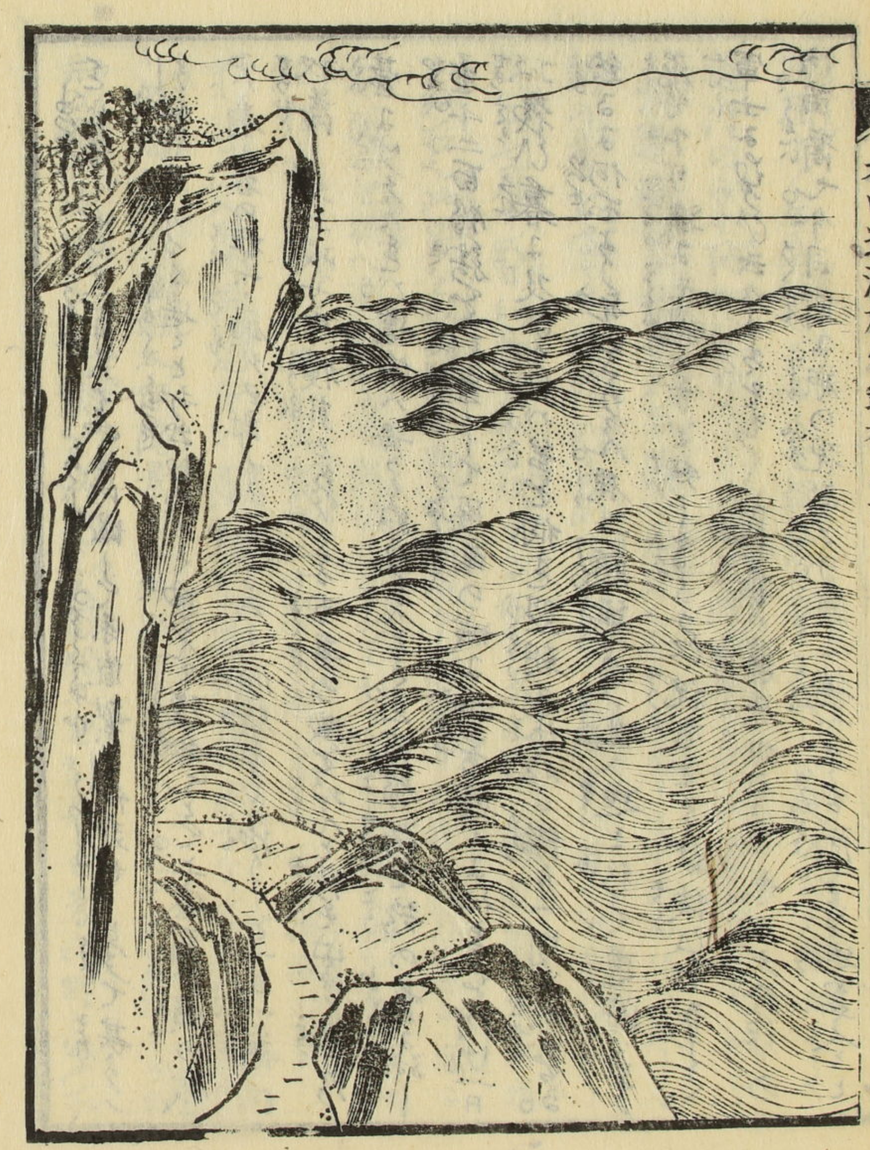
瀬二つあり。此外ゆハ渡るべ死平もなし。彼所ゆうゆ鳴の墓ハ登さ山ハ方芝坂嶮しく馬の鼻突くゝびなれバ。進退窮まる。猶ま大の方市川の渡り口ゆを横川あり。僅ま細き橋一つを毛バ此橋を敵外せバ人馬の通路を失ふ南の方ゆハ真間の重松森を以て城中を震ひ隠し又搦ま松戸の渡りゆも坂嶮し死細道ゆて。たりま矢倉谷吟ハ矢切と以ふ。て深き谷あり。通路塞くさし。東一方のを平地ま。殘きうを毛ハ堀を深く掘り新しくま虎口を設け柵を振逆茂木茂くし双べ牢。櫓数多揚げく用意悉く備へて。無双の城と毛聞こえうれ。故方毛ハ不亂繁内く語敵しるる。道灌事りて城を攻めバ敵のうまを窺ひ。此方より逆寄して付ちくうんと。

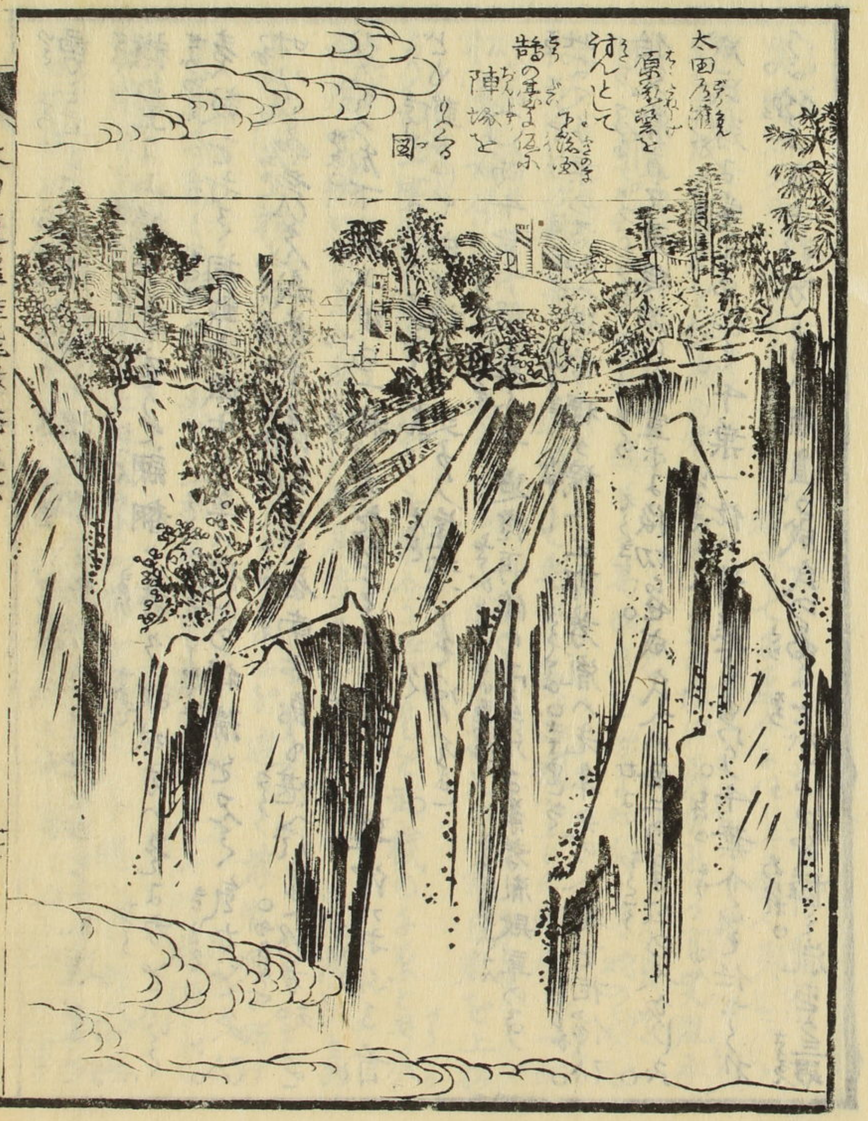
て内用意したりくるゆ。ゆうゆ違ひ。道灌ハ城を攻めべしく却く城郭を構へ用心厳しく軍もせざりしゆバ不ゞ支度相違して空しく日数を送り

ゝ。其後道灌案内知りうる所の者。数十人を求め出し。金銀を与へ密ま臼井の城ま義りうる。軍兵共の父母妻子。并ま雑人不の妻子ハまるを悉く捜し求め鵠の墓へ引入りて渠ハをより労りて人質ま毛ちうゝ。かくて後其由緒の者より。城兵の方へ云ハせるハ面くの妻子をバ道灌ゞ方へ預り置ぬ。今度道灌へ同り忠あらゞ。妻子の命を助るのゝゆゞ。先規の不領相違なく扇ゞ谷の家人となるべし。若し又城を乱繁ま一味しゝ。あるゆ敵ゆるるものゝバ毛ハ非ま及バざるゝ。さあらバ妻子の命ま拘りゆゞ。しと慇懃ゆゞ申送りる。城兵ハ毛を安くより早晩心を離へし降参せんと計ふゞる。城中ハ仁のとなく。

物騒しくなり行くと互に人を疑ひ、くよ〳〵捨けくよ落去さく
道灌の命令に馳加はる。かゝる〳〵城共残り止るもの漸二十騎人とぞ聞こゆ
る。道灌は軍勢千五百騎の忠誠を今は易しとて五百騎へ残して
鵠の巣をせめ。道灌則五騎を率して降参の者共を先陣とせり。
同年七月廿日臼井の城を攻る。城を示式部少輔亂繁。今を道
灌此勢を以防ぐも我も劣べく偏に討死と思ひ定め僅に
二十騎人を従へ、諸くなる戦ひしが、さらと引く城に入頼て火をそそべ。
煙々と立登る其間に郎従二十騎人の者ども一図に猛撃切交乃
中へ飛び入る。城内も防ぐ落ちる。道灌は彷徨つゝ凱陸を此時
上杉定正に語る。定正を責死しが臼
井の城の後詰して亂繁を救ん。と五百騎人を引具して当我野とゆみ和

を出張しるが臼井へ城しを系亂繁し討死せしとゝて其ノ
引退しるが遂に打出むれしくゆらんも残念とそ。上徳國小濱の城
中へ扇ヶ谷の旗下、藤北太郎右衛門尉が十騎弱ゆく籠りしを一日一夜に
攻落し又土岐七郎頼貞が籠る万喜の城を攻んと後を守る鵠乃
墓は少々なれども。道灌は安房国へ三百騎弱を請の墓るに
重千二百騎を率して藤南の城は押寄騎くは仕寄を附け。一日
攻戦ひ暮は及びくれば。寄を納を翌朝又未明は一図は攻る。
然るは伊豆より死せうん鹿二頭猪より先へ進み行く。道灌は
飛び下り遥は王城の方を拜しうに祝言をさげ後ひを
軍士は云るもそもく上杉家は藤原姓なるく春日大明神の
法苗裔。今日前は庚の現るる軍は携べき吉瑞と奇進めを人と




太田道灌雄飛録巻之六
太田道灌
原野雲を
はらんとして
時の声よ伝ふ
陣場を
図

勇を立てバ各信心肝に銘じ勢ひ勃然として独せ知るべし。上道灌北
旗の上に山鳩二の色者と翩翻と舞ふ。故味方ハ色に力を付く。
麦鼓を打て相戰ふ。城中の輩ハ彼此の祥瑞を見て気力を失ひ。
叶ハじとや思ひけん我先にと落行けバ扇南左郎も堪へ兼て形方知れ
なりける。下總上総の一揆ども。ところ〻に敗北を道灌ハ打ふる者
ども斬うけ。城を放火して夫より往ハ〻ひ〻ける。

○西千葉下總を事ふ兵道灌再鳴の臺出張に乘孝亂敗軍の
此ハ又千葉の加入道常胤が嫡子三郎孝亂ハ先年父の入道を相伴ひ。
伯父亂直元が役所の亂宣ホに依切らせ。成氏へハ亜二の孝公の人なり。
成氏孫に覚しめ〻く。千葉一依ハ皆悪くなり。千葉介に任ぜ〻れ
る。拙るに上杉方よりハ亂直ぐ成氏のるに七びくるを憐み。亂亜ぐ三男

実亂を父の一法とし〻く。是又京都へ中〻千葉介に任じ。下總へ差遣ひと
父ども成氏孝亂を秘蔵の者に思ひ。千葉の城に差置ける用実亂本
領へ入部ふ叶ハ〻武蔵の石濱并に葛西を使に知行し〻く時の〻を
待ぬ〻しが終に世の中を述懐し〻道世し。英濃國へ上り〻閑居し。一向
仏恵に帰依し〻く居住ぬ〻る。さるによりて其兄の次郎自亂を上杉
より立て実亂の法をまひく千葉介に任ぜ。是を武蔵の千葉と号ス。
今度下総の千葉介孝亂ハ長尾景春と一味して。ひく〻敵ひ。その
上又成氏上杉と。山和終ハ拙るべ〻ぶるの由を遮り〻く。孝亂頻に妨げ
ナせ〻ぬ〻の振舞を悪く上杉家の讐敵の隨一。此時退治し〻く
自亂を立て魁首と〻。上杉よ〻く加勢を差し〻下総へ兵を打入らせ
る。扨徳州の地士共千葉の嫡流絶ぬを歎きぬ〻るおあれば。色〻

自亂へ屬し。上杉方も此すを成氏へ内書を始加賀の
やくを世ゞ彼くに綱ゆまして。太田道灌より命ぜらる。道灌則從ぶして
又く國府臺に陣城を搆へる。文明十年十二月十日千葉孝亂ハ居
あづ〳〵敵の來るを待てバ長氣孫〳〵くたびれ。我ひ勝るべくこゝ。
まん途へ出く戰ふと。家の子原二郎亂次木内弟為信を先鋒と
して。總國境根原へ張も。道灌是を守くとおとく。千葉自亂と
才國書狀を左右に使ひ。舟藤加賀守を先陣とし。宮田源八郎を後備
とし。敵味方間近くゆまるに互ひに旗のもを先相まりにまりく
戰ふ。道灌が堅陣右を打バ左りより扶け。あを責れバ後より救て。
孝亂が方ゆくへに負討死多くまゝ。孝亂獅子の怒りを發し各を
一つゆく。太田が中軍へ切入と。弟を搖く小勢もまゝバ士卒ホ各一る

なり。道灌が旗を立く高平地に寄込ゆバ。千時千陣に合圍の見を
吹くるに。先陣後陣左右の備皆一同に鬨を合せ。千葉舟藤太田宮田。
戰ふ聲を上ケく。孝亂が軍兵を十重廿重に取囲む。一人も洩らじと攻ふる。
孝亂ハ陣中に引籠もゆ。此囲を出んとすれど。堅きより鉄桶のゆく。
右に御方ゆ御ども。被ゆる能ハぬ。則拙為武庭が秘く〳〵ゆ和の
常山長蛇の陣法ゆるとバ。孝亂も既に討死せんと思ひ究やく。二男和郎等
ゆ木内御兄に。ゆく独せ。太田入道が計策ゆより味方多くゆ
う君ゆ。ゆく此西を退城後度の西合戰ゆ。我と實ゆく討死し多
年の恩を報ぜんと。ゆ亂次ハ先へ。木内為信ハ後に從ひ近付く
者を追ひ拂ひ。是を從三殺終に一方を切拔こうれど。ゆも木内も朱に
ゆく數ヶ所の疵を蒙こうとバ。孝亂を白井の方へ離しゆ。今ハ易と

敵陣に独せ入く。高人とゝゆふ乱軍の中に討死を孝胤ハ家の子に討死を
妻念ハ子ども是非なく別れを早めて急ぐ所に討残されるものども。
追々に慕ひ来り彼方と同じく漸に臼井の城へぞ入こゝる。

○道灌下総臼井の城を攻并太田図書助討死臼井落城の事

かゝる孝胤ハ臼井の城に籠り入く。急に使を以勢を集め。太田入道が考
者をぞ待こゝる。道灌ハ定正より一こん田陣をべきるゆ事なれバ。
則臼井の城攻をバ千葉介自胤。太田図書助資忠に命じ来く。武蔵へ向
陣しこゝる。千葉と太田ハ敵の猛病神のさゝるゆ。臼井の城を攻落さんと。
両勢合せて七百騎遥に掛もの分を定め。同十一年正月十八日。臼井の
城へぞ押寄る。孝胤も道灌が軍の仕様普通ハ超られバ味方大勢と
ゝども容易ゆも打て出ぞ。防禦の術怠らるゝバ太田方も小勢と云ひ。

殊ゆも要害の城に籠りこれバ管領へ出るの義をやとゝども。是も延
引に及びこゝる故両注力攻に成ぬ。引退く陣をこゝ。城ゆも
押への兵士を引して先敵方の者を討ちらんと。上総国長南の城を
武田三河の入道を攻るバ。同月廿日降参して自胤に属を。是を丸谷の
上総介も降を乞み。支り下総国飯沼の城を攻んと。残る和に城を
海上倫中る師胤故に。自胤へ傷を。バ自胤未
を入れ入れ。ゝども。両総州ハ大半両服こゝる間。一ト先長陣
のバ陣こゝ。七月十日陣拂ひ。武蔵へ引返さんと。
こゝ臼井の城を孝胤今故義此城を攻ぬ。
本国に変を生ずるゆ。何且ゆも平信に見物こゝる法やこゝる。我又彼
者が法を慕ゆ。下臨有こゝと士卒ゆ渡し城門を押

開き一度よ叫と発矢こう。太田勢ハ千葉自胤を先よ立せく。図書助資忠後陣よ打く徐こと引く形。子茅孝胤ハ月星の紋付く多藤を高先よ進め今資忠ゞ退口よ垂三垂三よ切く入る。男書助孔と返し。足軽の射て孔を下知くさんぐよ射出せば。孝胤ゞ先よの者ゞりくと射倒さるゝ。孝胤ゞ疲くゞ孔ゞれバ。資忠ゞ乗入ると自ら大ゞ刀打振く近知ゞバ名乗よ立塞り必死と防く。千葉介自胤ハ敵城中ゞ引く出ゞ後陣よ軍始りゝと孔ゞるゞ。此合戦を聚よ。臼井の城を乗孔らんと。侍を押ゞ一塀下ゞ付くゞる。孝胤ハ城を孔ゞらゞそへ往ると人数をさゞと引上げゞ城門へ引く入る。資忠ハ図よのりく却て敵ハ退くゞると。附入りよ城を奪れと。大ゞよ下知孔ゞれバ。刻の下ゞり佐藤兵衛尉桂徳房助。中納言坊などゞ孔る死生ゞの若者ゞも門内へ

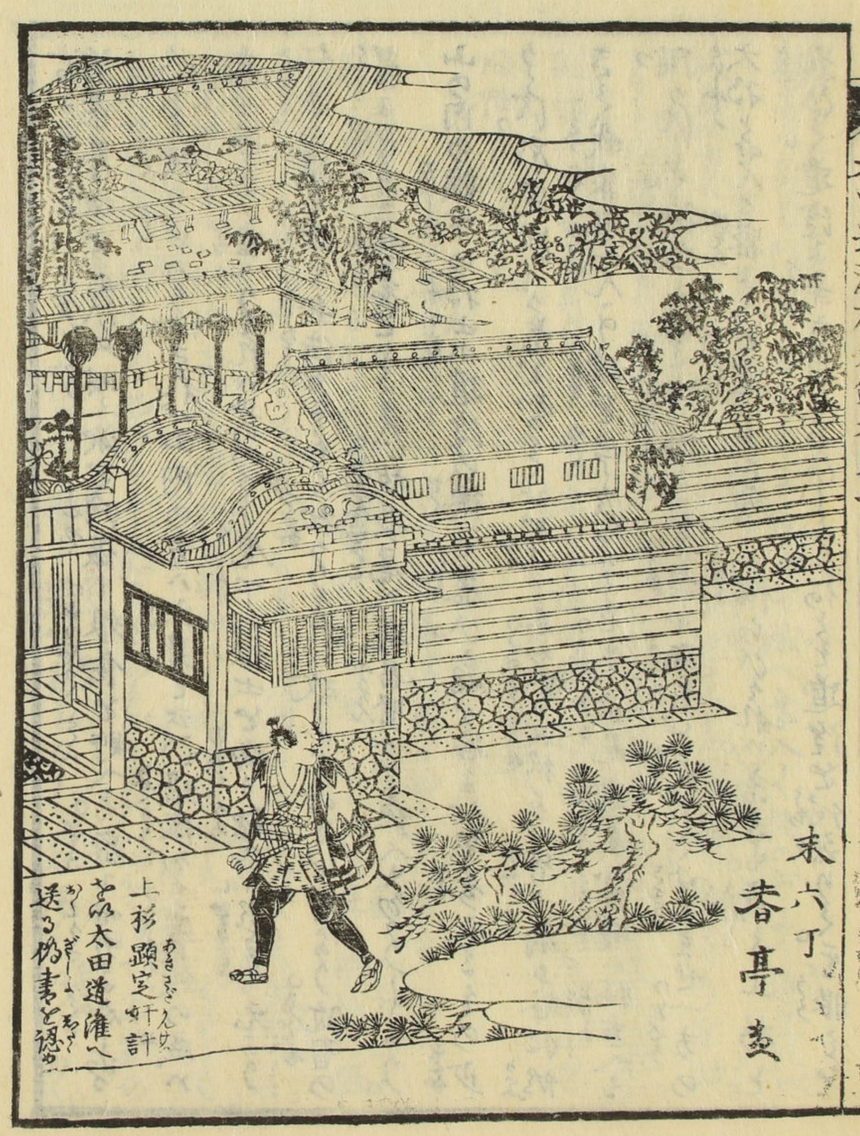
地入ゞバ敵ハ城戸を閉る間もなく追出さんと責強み資忠ゞ勇威を形ハ当ゞを幸ひ切て落ゝ先よゞみく働けバ士卒ハ形ゞを砕き。追ひ込めバ追ひ出ゞゞ変万化して変を為途と争ゞくり。其隙よ自胤ハ外郭を系破て城内へ乱ゞ入る城ゞも此城を落孔ゞと。ゞを投ゞけ矢を放ち祕術を尽しく防強ゞ資忠ハ力を揉て。自胤ハ外郭を系ゞくり此ゞも攻孔と切ゞども射孔ゞも物ともゞ。摩醯修羅の義くゞ交くゞ力を押直ゝ。敵中よ深入ゞ大ゞの攻口よ孔くゞる足軽ゞも侍くゞる軍烈ゝ孔ゞバ皆此ゞよ孔ゞ事くゞ小高ゞ孔よ双びゞく下り矢ゞよ射出ゞ矢ゞ雨のゞく深入ゝくゞ味方の面く六人資忠ゞ始とゝ中納言坊。佐藤兵衛尉桂徳房助ゞを始とゝ四十三人乱箭の為よ枕をゞくゞ死ゞを自胤ハ大ゞの軍強くゝて長上皆

彼平よりの防ぎ、城中より終に本城へ乗入る。後の方より追立れば。城兵四方へ逃る。彼暴徒ハ無念ながら元返さべき術もなく金ばかりを助るのみ。何国ともなく落行ぬ。そもそもよりこの臼井の城ハ自滅のまゝ入りられば。則城代を召て是を責せ。士卒長陣の疲れを労らひ石渋の城めざす陣しらべ。

○定正が近臣道灌を讒言。并道灌扇が谷へ出仕の事

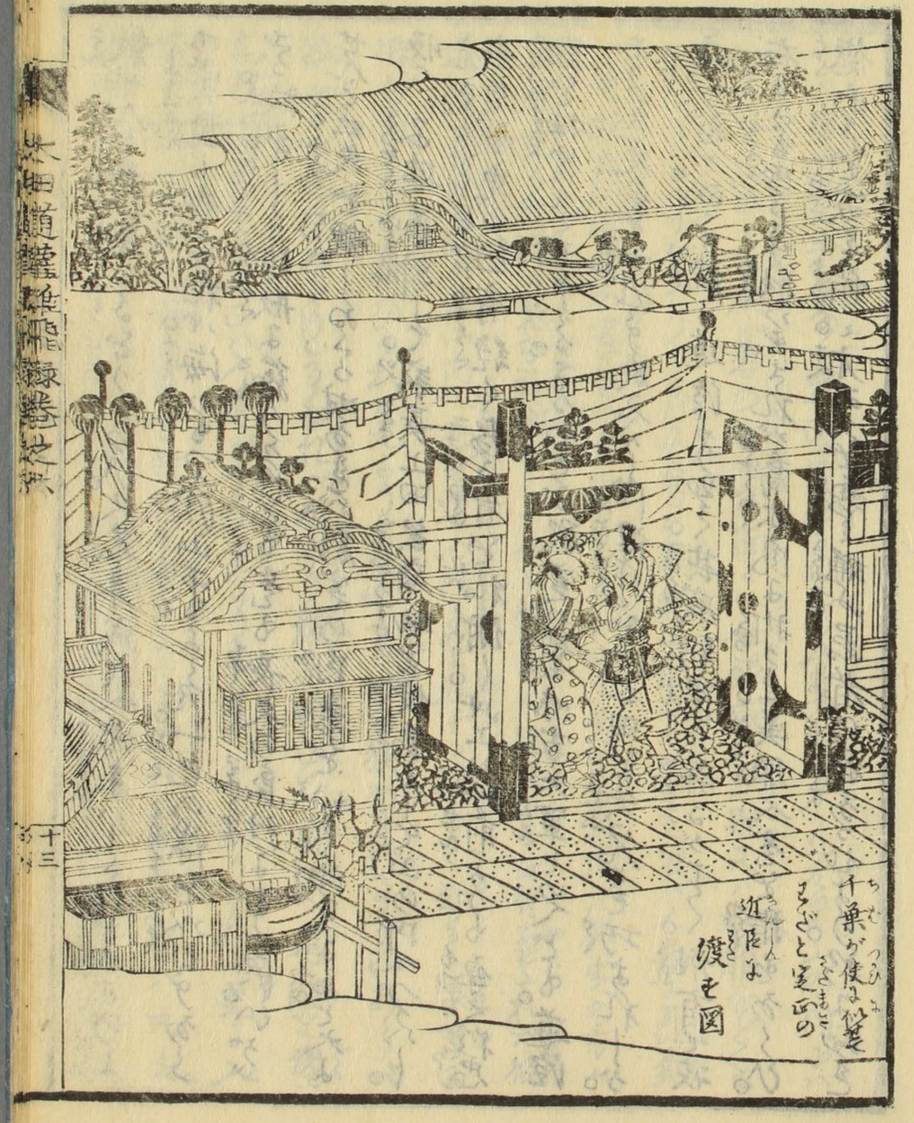
彼くの世ハ皆く穏よ成られど。管領ハ服定も定正も内ひハ互に胡越の隔ありて。今ハ仮目中も夫と思ふもの多ゝ。太田道灌ハ是を察し。此光景をハ始終あるべの確執と成ぬべし。今ハ讒言をもつて是を中を背よ返さんハ思ひもよらぬ。道灌後てお家のあるべの附の為せんと。彼も士を愛し農を惜。ひそかに者後の形ひ。

質素節儉を勇ひ又財を聚を修後し。粮食を貯へ。密に味方を忘しの人をも捜り求めるべ。されバ山内の方ハ大身と云ひ嫡流なり管領の威ハ扇が谷より重ゝられば。鬼下の侍士を侮り軽んず服定も元より仁義の道を疎く兵法も乏しく拙ゝられば。改まらざる者より近習の輩よ成るを我意をふるまひ。故長尾入道昌賢ばかりしあり。山の内の旗下の侍士ハ道灌の徳を慕ひ。扇が谷よ心を寄せ。その少ゝ服定の所を知ゝ苦しめ。彼ハ皆く扇ヶ谷に仕きく我家のこんの踵をぬ。先長尾景春當時ハ何方へも附ず。孤独と成く拝形とあり。渠が勝れを免しく成ぬ。一方の大将と成んと密よ人を遣ハし。彼くよ強らひられば。景春上杉と親ひく。道灌ハ辛き目よあひしの。何のとぞ道灌を行ゆりく。を眼



上杉顕定軍計を以太田道灌へ送る偽書を懲す

未六丁 春亭麦



千葉が使ひ髮まさごと足西の近辺よ渡を図

散ぜんとおもひ居たるなりといひ。又先年成氏へ降参ハしられども。さのミ忠賞甄もあらざれバ海山もつかれ山中よけ。一己の謀を以へ才ならざる故むしく許敗に籠りされども。是も長久の良計にあらだ。いろ〳〵せんと工夫を凝しぬたる時なりしバ。顕定の内意を好く悦びみちと大よ賜ぐべし子建兼引して家長上田玄蕃助を使者として山の内へつかハし。勘気赦免の趣有難く敬る旨を礼謝し。此上ハ以前よりも厚く粉忠勤を抽んでんとぞ申さするなりど。顕定ハ窮味方大軍とへども。道灌ありてハ定正を亡ほすが如かしだ。謀計を以太田を失んとぞ巧まれしが。扇が谷ハ改てり偏に道灌より勢く其威朝陽の昇るがごとく。誰有て扶右にふも出るなりぞされバ喬木風に折るゝ美服人是を指をなるひ。徳あるを嫉ミ儕ミ。才あるを悪ミ嫌ふ君者の邪なる心より起に始まし

てハ道灌を夫となく定正に悪さまにいふものも多かりしかバ。山の内にハ此よしを聞出して。扇が谷の近習の面々へ金銀或ハ器財又ハ衣服などを贈りて。かくれなきとりしかバ是等の賄賂に化されて顕定をバ人毎に贔負して。経落追従の事主の定正よりハ大切なりとおもひける。此者共顕定の方へありくまりて。猶り込の礼謝などなせし時。若く近臣共に云付られバ彼道灌をも忍びくに山内へ志を運ぶ様子を秘る術もなく。却く渠等に悟られ。かくに付ひられバ。元より暑癡盲昧の族なるべきすがれあらべ番吹んとおもひねたりしなれバ。わたり顔に悦びて。定正へ道灌を讒言を往きども。定正ハ入道が志ひ立よりよく其心を知りられバ更に入道を疑ハぞ弥内外の事を打任せ置きたるに近仕の面々十に八九ハ。道灌を忌ミ厭ひさわぐくまいさくのるとも尾に尾を付け君ハ知りかたきや。

太田入道此ハ知ることゝ山内殿より荷擔なし扇が谷を亡し氏君の四領を押領せんと計るもし。夫より太田ハ長尾景春も元より入道が緣者なれば密に彤定を入魂系させ。自らハ城を落ひ粮米を籠め忍びくゝ兵士を集め。山内と聯ド合せ一朝に発りく當家を退治せんと云由を洩聞を以て城を市虎三傳の後虚を以実と成るやく。定正ハ如の程ハ知上げぬ。のうぐ云ふもあぐきと打捨置れしが日く夜こゝに近習ひ者の中に成より。今の世の習ひ人心そうり。忠義一図の入道なれども。又人の中も面も理なりと。終に阿諛の小人の説を信じて。道灌戎踏むべきやうなる。かくとハ知らで道灌ハ荏去の越のあ城後後終て扇が谷へ出仕す。又山内へも系上ハ彤定ハ道灌来りしと。奏者の告に大に怒び不逆に「間へ侍ど。是迄の戦功を称美し足下扇が

谷に居ることハ我が家長に同じ定正の武威を輝しつゝハ是又高恢の威権の助けと此上せに家益水魚の思ひを抱し東国を統ひんと殊の外慶喜の分に成く山海の珍味を備食応に丁寧に日も暮に及び頃道灌ハ厚く礼例し己が居所へ帰り多聖朝ハ疾く出立して大住郡糟屋の館へ帰り是に暫く逗留して後又近辺のことも巡見せんとて。兵を引き帰えるなり。

○上杉彤定が奸計に依て。太田道灌相模糟屋に対死の事

彤に日道灌山内へ帰りく。彤に入るを居くして。又例の使者ども。陳謝の体後と。定正へ告ることゝ成る延に。扇が谷の門の邊り。田舎武士のあやしげなるが。一つの文を持く。二三度ばかり徘徊して。又来り門内を窺きぬ。しるる。不審くんえしまく。門戸

ものるものを怒るは彼男の云我へ武蔵の手前よりの使ゆく太田入道殿の内の人へ申入て書状日より此は勢もと宗〻多〻ひ
ゆく。内の人へ届けみしてん六と無骨ものゝ所定正の近習の者出仕せしが此状をえんぐんじ。何なる此文箱ハ由緒あるゝんと
思ひ側へ寄り内を見ハ多数の使ゆく某い入道の筆九郎定正と云
ものゝ。入道殿へ届け給へ、内後しあれとやれば彼士恐ひて出門の
人を待ゝ久子細を。慥ゆ渡しあれとを人もやれへば違へぞさげおれ
とて帰りゆく彼近習の人ハ直さま定正の館へ出く。ちゝくの様子我のべ。
彼文箱をぞ見せしゆる定正も疑ひ左右の人ハ捜せく見せをれば。
千葉自胤よりの書状也。軍勢も大〻集りゆへ内〻文の様る我
猶〻絶倉ハ弛給へん。彼定正の大勢も遣く出立の間序なゞら

ゆゝせ給へとぞ書ゆゝる。元より浅智の上移定正為〻く従ゆ我ハ敵
さまをて酔ゆゞ〻くんの中赤ゞ決断せゞる処ハ彼定ゞ一紙の偽書奸
計のあるよ仰怒かさ〻り忽怒一時ハ発し大息強く拍の道灌祖先の
旧恩を忘却し。我又大小と為く政ゆを安〻秘蔵の者ハ〻ひし〻我。
かへりて敵ハ〻と考せ三代相恩のまを失ハんとゆる無道人ゆゝく怠にもひ
ゆゝせんと再応実否の礼しもゆく。道灌の付をゝ高名と合へ軍勢を
集るよ百騎ゆゞ記しゆる。内ハ彼ゞ備の内ハ誅罰せよと文明
十八年七月廿六日糟屋の館ハ押ゆ給へ。周の声をぞあげゆゝる。太田道灌ハ
主人定正かゝる企あゝとハいゝでもひ居ゞ。何ゆく居ゆゝ此附の
声を聞ゝ少しの驚ゆゝ。敵ハ必定山内ハ又ハ系図入道ゆゝんと猶
ゆく投ゆけ忍の緒をゆゝと結び上帯あめて太刀を引提げ摺ゆ上りく

たてのまゝハ案ニ相違ー形定めあぐりて。主人定正の旗幟ニ
さし上ゝ初ハ僅人ホガ為ニ寃の係を蒙るとて無念なると君ニ対ー弓
ー人ハ逆心ニ似れとも徒ニ後切られんもそゞひ。勇士ハ名ヲ惜ー
全く為ニ敵ニ対するにあらず。僅者ニ報ゝと矢把ヲ解く押ー乱ー。
櫓の上ゝ矢つめ引後めんく矢を射ゝる。道灌元来強弓の足ゝれバ
弦ニ応じて射器さゝ者既ニ三十人なり。太田ガ家の子郎等ハ皆荏田川
越ニ鉄ヲ敷き堅ゝ櫓ハ後ひ寄ゝ僅ニ三十騎人ニ此者ハ堀裏
矢挟間より矢繰ニ射ゝ敵ニ負死人七十騎人出来
ーゝれバ一責ニ退く道灌の方ハ矢種ハ皆射ーゝ。のつまゝ
かくゝゝきと城戸を堀と押開き者ヲ刀を差かゞ嚔と喚て切て出必死の
軍ハ三十騎人一ニ敵ハ寄ゝの方ハ討ゝ甚多ー。されとも

多勢のゝ引包んで責ゝ。此ニ於て敵五百十人枕を並べく討死
ゝ道灌の兵士も残り少く討死ー。五六人ハ如ゝ道灌ハ先を
家期の軍ニ眉ゝ眼ゝ十項羽百樊噲ガ勇ヲ
向ふ者ハ甲も紙ハ如ゝ或ハ割子割車切又ハ大袈裟ニ討
故ニ逃るものハ押付総角二三の枝の矯ひ
討事此ニ於ゝ十三人ゝ道灌ハ前後ニ敵
立て。猶も励ーく我ゝ敵ニ入道ガ為ニ離
ーく地ニ我付ゝ追ゝ巻く。道灌ハ相ゝ
三人ヲ討ゝ。仰ニ敵ニ二人を討ゝ
大石左衛門と名乗く。道灌ニ突て
切るゝ者の二人左右ニ討く。道灌三人を

先刻より数ケ所の戦ひ。数ケ所の疵を負ひ。力已はてゝ。くるしみ。めく豆を噛て。すき間をうかゝ大石彦次郎。道淳が後を門の柱に突付うて。其時大石が弟。いとゆゝしき田舎。きへんの達人なり。此時も打ち倒さんやと。刀を取て。道淳。覚悟と打ち掛ひく

かゝる時。たゞ今命の惜しゝ。ものゝ首級をとれて味方の陣へと。御ゝく眼を用ゐるべし。若二郎。老子。その首級をとれて味方の陣へ。ゆる。道淳が郎等五騎も一所にありく戦ひ。名誉を後れば入をれ討死をも。故ありあこがれ共よ。冥土の供せんと。打物投捨て向ひ。敵と引組て。ちゞ人ともを死しうる。善悪の者共士多く討死しうれども。鬼神の死道淳を討れく。猶と。をとげ。扇が谷へ引入し。道淳の首級を定正の実猶よ入れが。定正大きよ。悦び。大石若二郎。大石厚く恩賞をあゝ入。後北

患をのゞ死うと。思ひしゝ。定正ハ扇が谷を。時ひ。物の多ノ政事も正しゝ。ぶれが。背くものかゝ。此よ。道淳を。保しうゝ。を。法師を。どゝ。生かひ。さゝ。になりうゝ。道淳の七殿ハ。別。秋山の上。糟屋。伺。昌院。茶毗。を。越生の。能。穏寺の。末。ありとゝ。

按ずるに。かゝ。所。附の。ものゝ。道淳。討死の。時。とゝ。非。暮景集ま

康正元年の。藤沢の。役。ゝ。あゝ。ふ。ぬ。れ。ど。も。康。敵。の。武。威。強。し。ゝ。

うんくるに恚りし罪なく謡をあつせしめの男なくるさの男つきそあかくれて。
やがて中村なにがし首を執く。豪傑の事てかくありんとかくありたに。いまだ時尚
中もなお男のまなかしてかけらるべき人心地なり。鑑のあてりたがいだ
たましめつ。我もやまし。あられがたくてぬ僻なり中村手に死せ所んぞんへの
霊し死ぬ事むつるのまくま向かくきめ侍りたれバその首をむつかしく
かくぶとれ。さしもいのちを惜しとあらバこそなくさめとも思ひあらそれ

返し　　　　　　　　　　　　　　道灌か脇手犯

なくさめとも道灌もあまども詠ともれ。今つまりのちとよとしぞ思よ

康正元年乙亥より文明十八年丙午道灌討死まで八年間三十二年にわれ里。
又此に憲宣とありしも粉りてく小書に異本に憲実とあるハ是又謬れ要。
系図に憲定ハ憲方入道道合の二男也。安房入道大全とあり。此人それ

応永十九年壬辰の十二月十八日頓死を持氏卿治世の始めなく道灌出生に廿
一年およそ先になく。時代違へり。此にある憲実を別人なるべし。将又ぶ疑ふべし
太田道灌の辞世。白石先生の著せる書まよ出たると羅山先生撰述にあるとしるよ見え死を
もろくの異安撰をのせ置し。なんなし。家の集いまだ見ずれたるも
案に又道灌の郎従斎藤加賀守ハ智謀才能人に超へ軍法に古実
に達し。道灌討死の時ハ江戸の城にありしが道灌死後ハ
浪々しく多摩郡に閑居して在りしを。室町家より召すを免知り
ふるまかさなく天中をりつ郎等とかならす扨川越江戸城に
城代なくてあるべからずとて。川越の城中を守良の所朝良の旗下
曽我兵庫助祐賢を遣ハし江戸中を曽我豊後守祐重をもちて籠め
なる。独りといへども文武に優る道灌なれバ。死しぐるなり旗下乃

ものどもの心うる皆心を寄せ忍びくる。山内へ志を通じる。ために
ふかく扇が谷。いぜんよりかたらひ威日々に衰へゆく。ひしを
忠あるく私なきを清き奸佞邪曲の小人のたぶる徴せ〳〵しく。教
幸の勲功一朝にして子晋死しく其を因て花増幸し
楚国古より今に至るまで。忠義を尚ひ徳を重ぶる
ものなし。是流ごとく死ハ一事として死所あるべきなく文武共
英雄あるく末代に名を残なるべし。思ふ明かしく時
幸を待よ。是を害せ。又忠和合しく民を撫育し。
士を愛するのまま驕く忠臣の表掠に徴ひ。伊佩の思ひ
るく。是を亡さんとしく先是を殺せまゆるの事ひを知
知く。各文武に暗く明らかなる遠謀の功とあるべ

此時伊勢新九郎長氏本国を治窪しく強民今川に
食し大者をひくせりつ移とべき虎の手ひ鶴蚌の相持るを
撃へよ。山内扇が谷ともふ式ハ家国を亡し。我ハ他郷に潜く。
長く本国を忍ひしハ時運の極〳〵なるにあると。南上杉の
道清を害せしより。その起りとあるべし。太田道灌ハ相模に
地に死を遂れど其名ハ載の下にあるく。ひを仕ふ〳〵なり。
兄女をとゝ人ども徳を称へるハさるに入道の
功勲あるとゝ人ども。その全傳を記るべ。
あるて備書ハ散在せるを輯めて誤を正し疑を参考
して此書を著く童蒙ハさげくされど漏るとこの〳〵
後世を思ふ〳〵捕へるの〳〵大なる幸ひ〳〵

因に云武刕豊嶋郡岩渕の宿稲付村に禅院あり。自得山静勝
寺と号す 太田備中守道真 号自得軒 同 道灌 号静勝軒 此地に往昔太田道灌平常閑暇の
居跡と尚ちなみに道灌法躰の影像あり。什物に太田某の書せし
公の畫像あり。鐘の銘にも畫傳に記すと盛徴とするに足つて就設
山人石鶩此所に遊ひし時題する詩あり家に蓄て巻尾とす

灌公祠　　石正猗

千載称文武　閟宮依翠微　不愁陵谷變　家世日光輝

追加に云太田道灌二人の美童を寵愛せられける時二人を左右に置て二人の童に扇
をかゝせられけるに一人の少人のよめる「とをきれハをさまるやなびくらん扇の風も人のまにまに
と詠じけるを道灌いたく感じ何くも持のひあひてなな此之しまへしとて「蛇とりをバ
ありもつらにひとつをかはる風中もあそびとぞ家紫苅山随筆に見えたりと五老先生の夜話なり。

太田道灌雄飛録巻之六大尾

おのれ應仁記よりはじめてのあみをた
ちきりたれは世の治乱興亡いまだ
いきたらぬくさめのまのみのこる
なるをかしは此の比科書堂のおはし
雄飛録といふ書すてなしてせつへき
かの人の物語よりてくやしかりし
うちにいそやく纂考集すてみえよ
いつはりもなかりふかくこしくの

いくばくかあらしこの書にしたがひ
ものそのぬ此冊をもちみるにまことに
むかしつくりし説のやうにみゆめれども
よのあらそひ人道のつとめをすてゝあけ
くれまどふ実なるをあはれとおもひて
ゆくすえをもこの書にしたがひ此を
かくのごとく金はもはらひとせてくるる
ものなりとをしらしめたるなるべし

ことをたるあくまでかくしたるものの
うるをかいをかくるかん

竹柳園
石川雅望

文政三年庚辰秋八月脫稿鐫梓

江戸　希言子　木村忠貞著編

仝　画工　北尾美丸
　　勝川春亭

仝　画圖彫匠　加藤利助

天保十二辛丑年求版

大阪心齋橋通博勞町角

攝都書肆　伊丹屋善兵衛